

2025 年度（令和7年度）学校評価自己評価表

一ツ橋中学校区	校番 1 2	福山市立引野小学校
最終更新日		2025年（令和7年）10月1日

I 福山市

ミッション ビジョン	福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。 各中学校区・学校が、資質・能力の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、 日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。
---------------	--

II 中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容	児童生徒の現状	育成する 資質・能力	「学びに向かう力」「課題発見・解決力」「対話する力」「自己・他者理解力」「自己効力感」
児童・生徒に活躍の場を提供し、目標達成に向けて着実に取組が進められている。 地域の学校として、現状や課題を共有しながら、活力ある学校づくりを共に進めたい。	不登校や登校渋りが微増傾向にあり、取組を継続している。 探究的な学習について校区で推進しており、その中で、児童生徒が自ら問いを立て探究する姿が増えてきている。	めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)	自己を認識し、自分の人生を選択し、表現することができる力を身に付けている。
		中学校区として統一した取組等	小中合同の「自ら考え学ぶ授業」を実践するための研究授業を通して、全ての児童生徒が主体的に学ぶことができる学校をめざす。 探究的な学習の充実に向け、小中で連携して、9年間のカリキュラムを構想するとともに、「子ども主体の課題設定」「机からの脱却」(外部連携を含む)を視点にした取組を行う。

III 自 校

ミッション		資質・能力		課題発見・解決力	学びに向かう力	自己・他者理解力
「児童が主体となる学び」を教材・児童の変容から見直し、実感的な成果や成長を児童・職員が共有できる学校をつくる。		めざす子ども像	低学年	「なぜ?」「どうして?」から問いを見出し、進んで取り組んでいる。	課題を見つけ最後までやりきろうとしている。	自分や友達の良いところに気づいている。
学校教育目標			中学年	課題解決のための方法を考え、解決のスキルを活用して、主体的に解決している。	課題を見つけ、自分で決めたことを粘り強くやり遂げている。	自分や友達のよいところを見つけ、良さや成長を互いに認め合っている。
心豊かでたくましく 自ら考えて行動できる子どもの育成			高学年	課題解決のためのよりよい方法を考え、解決のスキルを活用して主体的に解決している。	課題を見つけ、様々なことに挑戦し、粘り強くやり遂げている。	互いの個性や成長を認め合い、学び合いを通して、自己有用感を高め挑戦しようとしている。
現 状						
<児童> 全教育活動における課題発見・解決的な学び、自己や集団の成長を振り返る活動の継続により、自己肯定感が向上している。しかし、自分の考えを持たないまま少人数の活動に参加したり、少人数では思いを出しても全体には伝えられなかったりと、学習者として十分自立していない児童がいることが課題である。 <授業> 「子どもの言葉から」を視点にし、授業づくりは広がりつつある。しかし、実を伴った学びにはつながっていない。その要因として、次のことがあげられる。 ・単元でつきたい力を意識したファシリテートが不十分 ・自立した学習者にするための手立てが不十分 今後、理論研修だけでなく、教材研究を深める研修を取り入れながら、誰もが児童の成長や変容を実感する授業改善に努めていく必要がある。 授業改善を進めることが児童の「意欲や自己有用感」を育み、児童の笑顔が教師の「授業づくりの楽しさややりがい」につながる。好循環を生み出すための授業研究に取り組むことで、働きがいの向上を図る。		研究	テーマ	主体的に問いを見出し、探究活動を通して、資質・能力の向上を図る		
			内容等	児童が学びを「デザインする」探究的な授業づくり		
		めざす授業の姿	<子どもが、問い続け、学び続け、授業づくり> ～「なぜ?」「どうして?」「やってみたいな」「伝えたいな」が生み出される学習方法の見直しと学びの過程の充実～ ○ 子どもが「なぜ?」「どうして?」と問い続け、探究する授業 ○ 子どもが学びをデザイン（選択・発信・交流・改善）する授業 ○ 子どもが「試してみたいな」「みんなに伝えたいな」と、わくわくして学びに向かう授業と教材の開発 ○ 子どもが自己の成長や変容を実感する授業			

Ⅳ 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立引野小学校

年 目	中期経営 目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)				最終評価(2月末)				
							□指標に係る 取組状況	力 _セ 達 成 評価	力 _セ 達 成 評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	力 _セ 達 成 評価	力 _セ 達 成 評価	総合 評価	改善方策
2	自ら考え 学ぶ授業 の推進	★	継続	探究学習を通して、児童の思いや発想を基盤に単元を作り、資質・能力の向上を図る	・生活科、総合的な学習の時間を中心に、探究し続ける単元の計画・実践 ・学びの質を向上させる教材研究・研修（評価・改善）の定期的実施	・児童アンケート「おもしろい・成長を感じる」等の項目で肯定的評価80%以上 ・単元末評価問題の正答率40%未満(低学年は60%未満)の児童の割合が10%以内	・児童アンケート「おもしろい・成長を感じる」等の項目で肯定的評価は82%だった。 ・単元末評価問題の正答率40%未満(低学年は60%未満)の児童の割合は9%だった。	4	4	・児童が主体的に問いをもつような探究学習になるように、授業研究や研修を充実させ、実践を共有していく。 ・単元末評価問題の正答率が低かった問題を取り上げ、間違えた原因や指導方法を考え、授業改善に生かしていく。 ・CBTテストを導入し、新しい学び方を増やしていく。					
1	自己指導 能力を育 む教育活 動の推進		見直し	児童主体の活動を通して、自己指導能力と共感的人間関係を育む	・児童が学校の課題を考え、取組内容を決めて改善を図る活動の実施 ・児童の発想を活かした異年齢集団の活動の実施	・児童会の選択した項目の振り返りが向上した児童の割合80%以上 ・行事等の異学年交流での振り返りに自他の良さが書ける児童80%以上	・1学期児童会主催で全校での学校かくれんぼや一迎会、エゴ週間の取組みを行った。 ・前期児童会の取組みを通して、自分の生活習慣を見直したり縦割り班で楽しく関わり合えたりできた児童の割合は全校で84%だった。	3	3	・2学期の行事を通して自他の良さを書けるようにし、学年をこえてお互いに見合える時間を確保する。 ・引き続き、児童会の子どもの意見を尊重しながら様々な取り組み振り返りを行う。					
1	子ども主 体の健 康・体力 づくりの 推進		見直し	体力向上・メディアコントロールの自発的取り組みを通して、生活改善と、体力・健康づくりを図る	・学期1回のメディアヘコントロールの学習と、生活振り返りの実施 ・自分に合った目標設定をし、体力向上を図る持久走・縄跳びの取組の実施	・学習結果をもとに、自分の生活の振り返りを書ける児童80%以上 ・持久走・縄跳びの取組で、自己目標の達成率が70%以上	・1学期のメディアコントロールを通して、生活振り返りが書けた児童が90%であった。 ・1学期中に、メディアコントロールウィークとメディアと健康について教室での学習を1回実施。	3	3	・メディアとの適切な関わり方や時間の使い方について児童自身が考え、主体的に行動できるような取組を進めていきたい。 ・個人カードやチャレンジシートを活用し、持久走や縄跳びの記録を見える化する。小さな目標を設定し、達成の積み重ねを実感できるようにする。					
1	地域連 携・働き 方改革の 推進		新規	校区の強みを生かした教育活動により、郷土愛の育成と教育環境の改善を図る	・地域人材等を活用した教育活動の積極的实施 ・教育活動の向上や働き方の改善につながる支援体制の構築	・地域と学校が連携を行った回数(教師・児童)年間で50回以上 ・地域への聞き取りや連携をもとに、質の向上や働き方改革を図った取組が、年間3回以上	・1学期中に地域と連携した回数は全学年で69回であった。 ・毎週火曜日の教材研究日の取組と、週に1回の定時退校日の取組を行った。	4	4	・地域との連携を継続し、地域の良さや強みを児童が見つけ、発信していけるように探究を行っていく。地域連携を100回以上行う。 ・教材研究を他の職員と共に行うことで、経験や知識の共有化を図ったり、他学年の学びを生かしたりできるようにする。					

[プロセス評価の評価基準]		[達成評価の評価基準]		[総合評価の評価基準]	
評価点	評価基準	評価点	評価基準	評価点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度 十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度 概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度 ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度 あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度 目標を達成できなかった。